

特集 第13回外国人市民による日本語スピーチコンテスト



最優秀賞

三国物語
(さんごくものがたり)
李 敏我さん

私は韓国人で、日本人と結婚して今は日本に住んでいます。私には子どもが二人いて、長男は日本で、次男は中国北京で出産しました。今日は、国の違いなどを交えて出産の経験について話します。

長男を出産したときは、日本語もそれほど話せず習慣にもあまり慣れてなかった頃なので、驚きと戸惑いの連続でした。

日本では、出産が大変なことだと思われていないようですね。普通の人だけでなく医者や看護師も妊婦に対して淡々とした態度で接します。出産は、病気ではありませんが、命をかけることには変わらないのですけど。

陣痛は夕方から始まりました。

でも、看護師たちはみんな帰ってしまい、助産婦一人と担当の医者だけが病院に残っていました。ところが、ひどい難産だったので、途中から院長が駆けつけてきてようやく産むことができました。

今でも忘れられないのは、外で待っていた夫が私を見て初めてかけた言葉です。それは、「殴られたの？」でした。優しい言葉をかけてもらえると思っていた私には、まさに晴天の霹靂でした。

でも、後から自分の顔を見て納得。顔中の血管が内出血して、まるで一晩中殴られた後のようだったのです。さらに、面会時間を過ぎた出産だったので、夫は家に帰らされてしまいました。あの一晩は、これまでの私の人生の中で最もつらい1日でした。

出産翌日からは、病院の食事にびっくりです。出てきたのは、肉まんだけとかスパゲティ、外で買ってきたような寿司の折り詰め。さらに毎回冷たい牛乳が出ました。韓国では出産後に冷たい飲み物を飲むことは体に悪いと、禁止されています。

また、風呂に入るように言われ、動かない体で這いつくばりながら、2階から4階まで移動しました。韓国では出産後3週間ぐらいは絶対安静で体を動かすことはありません。だから、死ぬ気で風呂に入

るとは思ってもいませんでした。

日本での出産は驚きの連続で、こんなに近い隣の国なのにどうしてこれほど習慣が違うのか、さらにどうしてこんなに病院代が高いのか、びっくりしたことを今でも覚えています。

さて、二人目は夫の赴任先の北京で出産しました。中国では、妊娠することだけで周りから大事にされたりちやほやされたりします。みなさんご存知のように、中国では一人っ子政策のため、二人以上の子どもの持つことが基本的に禁止されています。そのため、大きなお腹で長男を連れて出かけるのと、とてもめづらしがられます。

病院の先生たちも、二人目を出産する妊婦の経験が少ないためか、いろいろと質問してきます。そのおかげなのか、病院では24時間態勢で見てもらえ、日本で言うセブエ入院生活でした。

今回の出産では、夫もいつもいっしょに病院に行ってくれました。でも、いざ陣痛が始まってしばらく経つと、夫は仕事で会社に戻ってしまい、分娩室には一人っきりです。その上、医者と看護師計8人にかこまれ「どうして家族が立ち会わないのか?」、「どうして家族が待っていないの?」などと質問され、困ってしまいました。

出産後の入院生活でも、質問攻めです。長男の世話のために夫が夜帰れば、「なぜあなたの夫はいっしょに泊まらないの?」と質問されます。中国では、出産のとき分娩室の前に夫はもちろん、両方の両親や親戚など大勢が待っていたり、出産後も毎晩誰かがいっしょに泊まるそうです。

それでも、入院生活は快適でした。病院の食事はもちろん本場の中華料理で、見舞いに来た長男や夫といっしょに食べました。

看護師もよく世話をしてくれました。私が入院した病院は中国でも高級なところだったので、サービスもよかった分、料金もそれなりにかかりました。でも日本よりは安かったですよ。

日本で出産して思ったのが、少子化問題で子どもを増やそうとしているのに、病院は少なく、通うのに大変苦労することです。これでは出産しようとする女性が増えないのも当然です。でもその反面、子

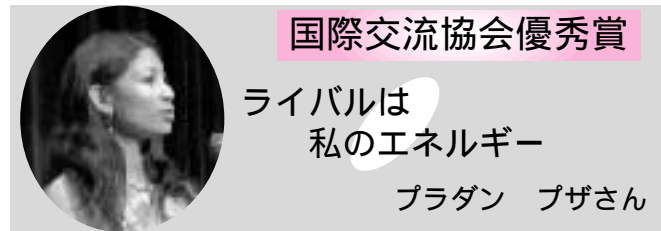
育てに便利なグッズがたくさんあります。それは韓国の友達に紹介したいくらいでした。

中国では、日本と比べると必要なものがあまり揃っていませんでしたが、その分人に助けてもらうことが多くありました。

妊婦や子どもには本当にやさしいのです。そういう意味では、日本も中国も出産・育児の点から見れば、どちらもいいところがありますね。

三人目は祖国韓国で産んでみて、比較するのもしいかなと思ってしまいますね。

日本では韓国、中国が注目されているので、出産に関して本を出したら評判になりますかね。



国際交流協会優秀賞

ライバルは
私のエネルギー
プラダン プザさん

皆さん、皆さんの友達はどんな人ですか。いつもやさしいことを言ってくれますか。困ったとき、励ましてくれますか。では、いつも自分の悪い点だけを指摘する人や、自分のライバルについては、どんな考えを持っていますか。みなさんもいろいろなところにライバルがいるでしょう。そんな人はもちろん、いないほうがいいと思っているかもしれませんが、でも、私はいつも自分にいいことばかり言ってくれる人だけではなく、私の悪い点も気づかせてくれる人もライバルも必要だと思います。私は今、自分はそのような人のおかげで成長したと思っています。

私は子どもの時、あまり話さない恥ずかしがりやの子供でもした。今みたいに皆さんの前で話すなどんでもないことで、初めての人に会ったら緊張して一言も言えませんでした。そのような性格のせいで、友達もいないし、自分にも自信が持てず小さなことでもいつも他の人に頼っていました。

中学の後半のころ、あるクラスメイトとけんかをしました。そのとき彼女は、他の人に頼ってばかりいる私をバカにして笑いました。彼女は、「あなたなんか邪魔なだけよ」と言いました。その言葉は今も忘れません。そのときの彼女の言葉は、本当に胸にグサッとつきささりました。でも、私はそういう

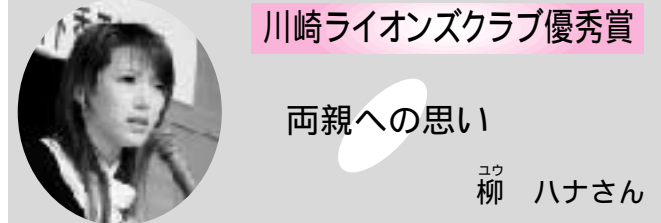
れてはじめて自分みんなに迷惑をかけていることに気づいたんです。それから、何でも彼女に勝ちたいという気持ちが自分のエネルギーになり、がんばることで実力もつきました。私は知らないうちに自分に自信を持っていたのです。これは、彼女のきつければ本当の言葉のおかげです。

私の国はネパールです。ネパールでは昔の伝統が今もそのまま残っていて、毎日の生活にもいろいろルールがあります。それに、日本に比べると女の人の自由も制限されていることが多いです。ですから、ネパールの女の人が一人で外国へ行くのはかなり難しいことです。自分はできると自信があっても、周りの人からいろいろな悪口を言われます。私が日本へ行きたいと言った時も反対されて、いろいろな障害がありました。でも、私はその障害に勝ちたかったんです。反対されると逆に、もっと何かやって見せたいという気持ちが強くなったのだと思います。それで両親を説得し、やっとおととしの4月に日本へ来ることができました。

日本に来てもうすぐ2年になります。来たばかりのときは文化などの違いから、わからないことばかりで本当に大変でした。また、勉強やアルバイトが大変で何回もくじけそうにもなりました。でも、私が日本で何もできなかったら、またみんなに笑われてしまうと考えると、もっと「やるぞ!」と頑張る気が出ます。

私はこれからも日本にいて、4月から日本の大学に入ります。これからの生活にもいろいろな新しい障害があると思いますが、それでこそ人生だと思っています。皆さんもそう思いませんか。

私はこれからもいろいろな障害を楽しみながら、また自分の欠点を教えてくれる人やライバルを見つけて頑張って生きて行きたいと思います。



川崎ライオンズクラブ優秀賞

両親への思い
柳 ハナさん

あなたが世の中で一番大切に思っているのは何ですか。そう聞かれたら、私は迷わずに「両親です」と答えます。

母は私がまだ幼かった頃の話をよくしてくれます。「あなたがまだ四歳くらいだったから。あなたを連れて市場へ買い物に行った帰り、疲れたみたいだったから、荷物があったけど、おんぶしてあげたの。そうしたら『降りる、降りる。』って大きな声で

泣きながら言うのよ。たぶんお母さんの苦しげな息遣いを聞いたのね。あなたは本当に思いやりのある、やさしい子だった。お母さんにとっては天使みたいな娘で、心の支えだったのよ。」

父は今、個人タクシーを営み、母は四年前から韓国料理の店を始めました。しかし、母は事情があり、それまでは家事以外のことは何もできなかったのです。

それは私が八歳の頃から高校二年生の頃まで、私の家で親戚の子どもを預かり、育ててきたからです。親戚の家庭の事情で、叔母の母を二人、叔父の息子を二人、そしてまた別の叔母の息子を一人と、全部で五人の子どもを預かりました。私は一人っ子だったので、初めはとても嬉しかったのですが、実際に一緒に暮らし始めると、彼らから仲間外れにされたりして、とても寂しい思いをしました。

また、並んで座った子ども達みんなの前で、「あなたたちはみんな一緒。私の子どもよ」と母が言ったとき、母の愛情を独り占めしたかった私は、さらに寂しい気持ちになりました。

そのようにいつも寂しさを感じながら、高校生になった私は、自分から両親を遠ざけるようになりまし。私の将来についていろいろ心配して、アドバイスしてくれても、私はただうるさい親だと反発するばかりでした。そのうち、家にいるだけで息が詰まりそうになり、どうすれば両親と顔を合わせないで済むかを考え、友達の家泊まり、家に帰らない日もしばしばでした。両親は私に言いました。「私たちが何を言っても、悩みの多い今のあなたの耳には届かないでしょう。だから、私たちは待ちます。でも、できることなら、少しでも早く昔の優しいあなたに戻って。」しかし、そのような言葉にも私は耳を傾けませんでした。

ところが、ある日、父の後ろ姿を見たとき、その背中が寂しさや悲しみを漂わせているようで、私の心の中にふと今までとは違う気持ちが起こりました。ちょうどそのとき、母は台所で鼻歌を歌いながら、洗い物をしていました。その鼻歌は私が小さい頃、母がよく歌ってくれたものだったのです。

「世界中で一人しかいない私の愛娘よ…」
親戚の子ども達と暮らしていたとき、両親の心の中には娘だけを可愛がるわけにはいかないという思いが、葛藤が、ジレンマがあったことでしょう。子どもの私にはそんなこと理解のしようもなかった。私は涙が溢れてきました。幼い頃の思い出が頭の中に甦り、突然今の自分が情けなく思えてきました。今の私は両親を悲しませていると思いました。私は両親がいつも私に言っていた言葉も思い出し

ました。

「あなたは私たちの光、希望、そして、夢」。このとき、私は父がいつも言っていた言葉を胸に刻みました。

「時間は君を待ってくれないよ。チャンスはいつでもあるものじゃない。後悔しない人生を送るためにはどうすればいいのか、いつも思うことが大事だよ。」

私は誓いました。後悔しないように、精一杯両親を愛そうと。両親にとって、私がいつまでも光で、希望で、夢であるように努力しよう。いつの日か私に子どもができたとき、私は両親からももらった深く大きな愛を、同じように子どもに注ぎたいと思います。

お父さん、お母さん、ありがとう。私を産んでくれてありがとう。それから、愛してるよ。

講評
関口 明子審査委員長 - 社 国際日本語普及協会 地域日本語教育担当理事 -
審査員の方々と20分間お話をしたのですが、順番をつけるのは酷ですねという声が出るほど皆さんの出来ばえはすばらしかったです。それでは、講評に移らせていただきます。最優秀賞、韓国の李敏我さん、スピーチの内容に引き込まれました。日本の産科で出産した時の医療について話された時はちょっとショックでした。でも日本にはすばらしい病院もありますので…。
「殴られたの?」といわれるほど内出血され、大変なお産だったのだということが伝わってきました。出産の後、運ばれてきた食事がスパゲッティや肉まん、冷たい牛乳ということに、びっくりしながら引き込まれて聞いていました。また中国ではお産の時、皆がみまもってくれ、温かくつつんでくれるということを聞き、お産の時の様子がよくわかりました。ユーモアを交えて話され、好感の持てるスピーチでした。
川崎市国際交流協会優秀賞、ネパールのプラダン プザさん、タイトルからどういうお話になるのかと期待しました。反対される人、または自分にとってライバルになる人から言われたことをエネルギーに変えてがんばっていきましょうという強い力を感じました。聞きとりやすい日本語で説得力のある内容で印象的でした。
努力賞の方々もすばらしいお話を聞かせて頂きました。皆さんの点の差はわずかでした。どうもありがとうございました。